

平成25年度 卒業生答辞

長く続いた冬の寒さもようやく遠のき、春めいた暖かな日々の到来が感じられるようになりました。本日は、このようなすばらしい式を挙行していただき、卒業生一同を代表して厚く御礼申し上げます。ここに卒業の日を迎えられましたことを大変嬉しく思います。

またお忙しい中ご臨席賜りました学長を始め、先生方ならびにご来賓の皆様方に、心より御礼申し上げます。

卒業を目前にして、そう遠くない春の日に、横浜国立大学の一員として迎えられた入学式のことを思い出します。それまでの慣れ親しんだ仲間たちと別れ、大きな期待と若干の不安を胸に抱きながら、緑あふれるキャンパスで過ごす、新しい環境へと飛び込みました。その後の四年間、多くの人の庇護のもとで、志の高い仲間たちと出会い、共に学び、遊び、そして自由に思考する豊かな歳月を送ることが出来ました。

私は経済学部国際経済学科の現代社会福祉について学ぶゼミナールに所属しておりました。ゼミナールで様々な社会福祉問題について学んでいく中で、私は教育機会の均等化について特に関心を持ちました。座学だけではなく、クリエイティブ・スクールとして生徒ひとりひとりに向かい合った指導を行う県立田奈高等学校へのヒアリングといったフィールドワークも積極的に行いました。そうして学んだことを、卒業論文として昇華していきました。その作業の中で、年々奨学金の受給学生が増加する一方で、その九割近くが貸与の奨学金を受けていること、またそもそも自分の意思に沿った進学を選択を行えない高校生、中学生の存在など、日本の教育が抱える多様な問題に気づかされました。そしてその事実が、子どもたちの自由に未来を選ぶ権利を守りたいと、高等教育機関にて四月より働きはじめるきっかけを、私に与えてくれました。こうした経験のすべてが、未来の私を支えてくれる大切な宝物です。

四月より私たちはそれぞれの新しい道を歩みはじめます。私たちは皆、20余年の歳月をかけ、ようやく社会という大海へと漕ぎ出していきます。穏やかな波に揺られる心地よい日もあれば、荒波に飲まれ迷う日もあるでしょう。そうした中で、かけがえの無い青春時代を過ごしたこの横浜国立大学が、私たちの最初の港であり、心の拠り所となることが、四年間の大学生活で得た最も大きな財産です。その財産を胸に、未来の子供たちが安心して楽しめる社会、そして心から誇れる母国を、グローバル化していくアジア社会において維持・発展させることに、尽力していく所存であります。

最後になりましたが、私たちが無事大学生活を終えることができるのも、先生方や事務職員の方々、そして家族など皆様のお力添えのおかげでございます。重ねて、心より御礼申し上げます。横浜国立大学がこれからもすばらしい学府であり、またより一層の発展を遂げることを祈り、つたない言葉ではありますが、答辞とさせていただきます。

平成25年3月22日
卒業生代表（経済学部）